

明治20～30年代の

児童雑誌の文章について(続)

—口語体作品に注目して—

小 松 聡 子

1. はじめに

前号の『ことば』7号に、「明治20～30年代の児童雑誌の文章について — 口語体作品の比率の変化に注目して —」を発表した。その中で、明治20～30年代の児童雑誌における文語体から口語体への移行について調べるために、当時の代表的な児童雑誌である『少年園』・『小国民』・『少年世界』の3誌を対象に、各雑誌に掲載されている作品・記事が、文語体で書かれているか、口語体か、それとも両者の混じった混合体^{注(1)}で書かれているかを調査した。(調査の対象については、くわしくは後の3章を参照のこと)

それによると、『少年園』(明治21～28年について調査)は、明治21年には口語体の比率が18.2%であったが、22年になると4.8%に低下し、22～28年は5%以下である。

『小国民』(明治22～35年について調査)も大体同じ傾向を示し、明治22年には口語体比率が53.3%と高かったのに、23年以後31年までは10%以下に減少している。

この口語体の比率の低下は、一つには言文一致運動の歴史的な流れと関係があるようである。山本正秀氏によると、明治17～22年までは言文一致運動の「第一自覚期」にあたり、22～27年になると「停滞期」に入る^{注(2)}ということだが、『少年園』と『小国民』の口語体の比率が明治22・23年に急減したのも、この歴史的な流れとつながっていると考えられる。

もう一つには、雑誌の編集者・記者の文章に対する意識が理由として挙げられる。

明治22年5月3日発行の『少年園』に載せられた「日本人第一の欠点」(無署名)という論説の中に、「支離滅裂^{しりめつれつ}言文一致と称し」ということばがある。又同じく『少年園』の22年9月18日発行の号には言文一致の文章を勧めている

礫台居士の「普通文章の説」が載っているが、この論の後に、「記者曰く」として、「言文一致もさる事なり、併し今日の処にては標準として害なき言文一致を書くもの未だあらざれば、俄に少年諸子に向て言文一致の文を書くべしとは勤むる能はざるなり」と付け加えている。さらに、『小国民』の明治22年9月10日発行の号の「作文の稽古」の欄に口語体（敬体）の投稿文が載っているが、それに対して「少年諸君にして言文一致体の文章を作るへ余り感心せざる所なれども（以下略）」云々と評している。言文一致に対する以上のような評価は他にも見られる。

はじめは子どもたちにもわかり易くということから口語体の作品・記事を書いたり、載せたりしていた編集者や記者も、口語体を積極的に評価していたわけではなく、実際はやはり昔からの規範にのっとった格調高い文語文を文章として評価し、子どもたちに文章の手本として示すには文語文の方がふさわしいと考えていたようである。そのため、年長の読者が増えるにつれて、ほとんどを文語体に変えてしまったのである。

ところが、『小国民』においても明治32年になると、口語体の比率が29.5%と急に高くなる。そして、33年27.5%、34年61.1%と増加していき、35年には100%口語体になっている。

これは、明治33年頃から言文一致運動の「確立期」に入った^{注(3)}のと同じ傾向を示している。

一方、『少年世界』（明治28～39年について調査）は、明治28年の口語体の比率が他の2誌よりも高く、21.4%の値を示している。そして、口語体の割合は増加を続け、32年には62.5%、35年には82.9%に上り、ついに36年には97.5%にまで達している。

これについては、『少年世界』の主筆が口語体で作品を発表し続けてきた巖谷小波であったことなどがその理由として挙げられるが、この時期の口語体増加の傾向は、山本氏が大人向けの小説を調査した値^{注(4)}と大体同じ傾向である。

調査する前には、子どもには口語体の方がわかり易いという意味で、大人向けの本や雑誌よりも早くから口語体が多くなっているかもしれないという予想が少しはあったのだが、あまりにも大人向けの文章と同じ傾向を示しているので、驚

いたほどである。児童文学の内容が世の中の動きに敏感に対応しているのと同様に、児童向けの文章も世の中の動きに非常に敏感に対応していることがわかった。又、人々の中に文語体こそ文章であるという意識が非常に強く、子ども向けの文章においても口語化が一朝一夕に進まなかったところから、一度出来上った「規範」というものの根強さを感じさせられた。くわしくは、『ことば』7号を御参照願いたい。

以上のように、前回は、明治20～30年代の児童雑誌の文章について、口語体の比率の変化に注目して見てきたが、今回は、さらにくわしく見るために、前回と同じ雑誌について次の2点に注目して分析してみた。

- ① まず、作品・記事の内容別に年ごとの口語体の比率を出して、その変化を見る。
- ② 次に、口語体の文章の文末に注目して、年ごとに敬体・常体・それらの混合体の比率を出して、移り変わりをみる。

2. 調査した児童雑誌の概説

今回も、前回と同じく、『少年園』・『小国民』・『少年世界』の3誌を対象に調査を行なった。この3誌は、明治20～30年代にかけて出版されていた児童向けの総合雑誌の中でも、代表的な雑誌である。

以下、この3誌について少し概略を述べる。

(1) 『少年園』

明治21年11月～28年4月

少年園発行 月2回刊

A5版 32ページ

編集主筆 山県悌三郎

それまであった投書雑誌から内容を一変させて、総合雑誌という児童雑誌の新しいタイプをつくり出した雑誌。画期的な雑誌であり、ここから本格的児童雑誌の歴史は出発する。

(内 容) 論説・学校の教科に関連の深いもの・文芸作品・伝記や探検記等の軽い読みもの・時の話題・投書欄等。

(執筆者) 山県悌三郎・高橋太華・落合直文・森鷗外等。著名な文壇人も執筆している。

(対 象) 尋常中学生中心

(2) 『小国民』（『少国民』）

明治22年7月～35年12月

学齢館→北隆館（明治29年12月）→鳴臯書院（明治34年4月）発行
月1回刊→月2回刊（明治23年7月）

B6版→A5版（明治23年6月）

14ページ→増ページ→明治29年頃には100ページ前後

編集主筆 石井研堂→上村才六（明治34年）

記事の平易鮮明と挿絵面に新面目を開くことを意図した。

明治28年9月号に遼東半島返還を嘆いた記事を掲載したため、発行停止になる。11月より『少国民』と改題して再刊。

その後、29年12月、経営難から発行所が北隆館に移り、さらに34年4月、鳴臯書院に移り、読者からの投稿の欄を増やした。

『少年世界』（M28年創刊）等の雑誌におされ、衰退していく中で、言文一致運動の大きな盛り上がりという流れに乗ることによって生き残りを図るために、35年1月から少年言文一致会の機関紙となる。

そして、36年1月からは、『言文一致』と改題して、青年向けの言文一致の専門誌となった。

(内 容) 『少年園』とほぼ同じ。ただし、作品・記事の程度は平易。

(執筆者) 石井研堂・高橋太華・中川霞城等。

(対 象) 尋常小学生中心→高等小学校生の読者増加。

(3) 『少年世界』

明治28年1月～昭和9年1月

博文館発行 月2回刊

A5版 120ページ前後

編集主筆 巖谷小波

これまでの児童雑誌は、読者の啓発を目的とし、それぞれの主筆を中心とした一種の理念雑誌であったが、『少年世界』ははじめて資本主義的经营にのっとった雑誌。

(内 容) 基本的には『少年園』・『小国民』とほぼ同じであるが、文学的読物重視。又、読者や社会の嗜好や関心に機敏に対応。

(執筆者) 巖谷小波・木村小舟・尾上新兵衛(久留島武彦)・石橋思案・山田美妙・若松賤子・下田歌子等。

(対 象) 尋常小学生～尋常中学生と対象はかなり広い。小学校低学年向けの「幼年」欄、少女向けの「少女」欄も設けられている。

昭和9年まで刊行されていたが、明治39年までを調査した。

3. 文章の分析

(1) 作品・記事の内容別の口語体の比率

これまでに、『少年園』以下の3誌について、年度ごとにどのように口語体の比率が変化していったかを見てきたが、今度は、さらにくわしく、どのような内容の作品・記事が早くから口語体で書かれはじめたのか、反対にどのような内容のものが遅くまで文語体で残ったのかを調べてみたい。

a. 分析の方法

そのために、前回と同じ『少年園』・『小国民』・『少年世界』の同じ号を対

象にして、各年度の全体の作品・記事の中における口語体のものの比率を、作品・記事の内容別に出してみることにした。比率を出す場合、行数や文数を単位として算出する方法もあるが、今回も前回の調査と同様作品・記事数を単位として比率を算出した。これは、ある作品なり、記事なりが、口語体で書かれているか、それとも文語体か、又は混合体かということの方により意味があると考えたからである。

対象としては、『少年園』については創刊された明治21年から終刊になった28年まで、『小国民』については同じく創刊された明治22年から終刊になった35年まで、『少年世界』については創刊された明治28年から39年までの雑誌の中から、年ごとに3月号・6月号・9月号（月2回刊の場合は前の方の号）の3号を選んだ。それらの号が手に入らない場合は前後の号にして、臨時増刊号は避けた。ただし、『小国民』の明治35年の号は6月号1冊しか手に入らなかったもので、1冊だけを調査した。

そして、その雑誌に掲載されている全作品・記事を対象とした。ただし、会話文のみの作品・韻文・戯曲の台本・児童の投書・目次・広告・表裏表紙は対象から省いた。

内容の分類は、以下のような7つに分類した。

① 論説

② 知的読物……理科・数学・歴史・医学等の知識を子どもたちに与えることを主眼としたもの

③ 文芸作品

イ. フィクション……童話・小説等（創作・再話・翻訳・翻案のすべてを含む）

ロ. ノンフィクション……伝記・歴史物語・紀行・ルポルタージュ等

④ 軽い話題……時の話題・雑学等

⑤ 娯楽……クイズ・笑話・遊戯についての記事等

⑥ 通信……記者から読者へのお知らせ・メッセージ等

b. 分析の結果

以上の分析を行なって、その結果をまとめたのが表1～3である。表1は『少年園』について、表2は『小国民』について、表3は『少年世界』についてまとめたものである。

【『少年園』】

表1 内容別の口語体の比率——『少年園』（年度別）——

年度	論 説	知的読物	フィクション	ノン・フィクション	軽い話題	娯 楽	通 信
M 21	0% (0/11)	0% (0/7)	0% (0/3)	0% (0/3)	0% (0/4)	66.7% (8/12)	0% (0/4)
M 22	0 (0/4)	0 (0/10)	25.0 (1/4)	0 (0/4)	0 (0/21)	11.8 (2/17)	0 (0/2)
M 23	20.0 (1/5)	0 (0/8)		0 (0/9)	0 (0/42)	0 (0/3)	0 (0/3)
M 24	0 (0/3)	0 (0/10)	0 (0/2)	16.7 (1/6)	0 (0/26)		0 (0/1)
M 25	0 (0/4)	0 (0/5)	0 (0/1)	0 (0/5)	0 (0/28)	0 (0/4)	0 (0/2)
M 26	0 (0/3)	0 (0/7)	33.3 (1/3)	0 (0/5)	0 (0/17)	0 (0/2)	0 (0/1)
M 27	0 (0/6)	0 (0/7)	0 (0/2)	14.3 (1/7)	0 (0/18)	0 (0/5)	
M 28	0 (0/5)	0 (0/6)	0 (0/4)	0 (0/3)	0 (0/28)	100 (1/1)	0 (0/1)
平均	2.4 (1/41)	0 (0/60)	10.5 (2/19)	4.8 (2/42)	0 (0/184)	25.0 (11/44)	0 (0/14)

※ 斜線は、調べた3号については、その年にその内容の作品・内容がなかったことをあらわす。()内の分母は、その年の全体の作品・記事数、分子は口語体の作品・記事数。表2・3についても同様。

表1の『少年園』を見てみる。『少年園』は、口語体の作品や記事自体が少なく、例文1に挙げたような文語体のものが圧倒的に多い。例文1は柴四朗（東海

散士)の論説「朋友ノ感化」(明治21年11月3日発行)の一節である。

例文1

鳴呼或ハ能ク大功ヲ奏シテ芳名ヲ揚ゲ、或ハ中途ニ覆墜シテ毛ヲ炮クガ如キ者、皆交友ニ関セズンバアラズ。今日ノ少年タル者豈交友ヲ扱バザル可ケンヤ。(ゝと。は柴氏による。原文は旧字体。以下同様)

例文1はまさに漢文訓読調の硬くて難しい文語文であるが、他にもう少し易しく、やわらかい文語文もある。

このように文語体が圧倒的に多く、口語体のものが少ないので、どの内容のものが口語体が多いということに関してははっきりとまとまった傾向はつかめない。しかし、「娯楽」の記事が口語体で書かれる比率の平均が25.0%で、他と比べるとやや多いといえる。例を少し挙げておく。例文2は、例文1と同じ号の娯楽の「此の紋は動きます奇妙です」(無署名)の一節で、黒い5重の輪が1つの歯車を中心にして5つ集まっている絵の後につけられた文章である。

例文2

此の紋を凡そ眼の前六七寸の距離にて手腕を動かして急に円く環に転じて御らんない。五ツの環が面白く渦巻の様に動き出します、そして中央の歯車は環と反対の方に回転します。

読み易い、子どもにいてねいに語りかけている口語体である。

【『小国民』】

次に、表2の『小国民』に移る。『小国民』では、『少年園』よりも口語体作品や記事が多いので、もう少しはっきりした傾向が出ているように思う。

まず、文芸作品の中でも、「フィクション」が口語体で書かれることが多いといえる。口語体の「フィクション」の例を1つだけ挙げておく。例文3は、有名な「狼と七匹の羊」の翻訳で、明治22年9月10日発行の号に載った作品である。無署名ではあるが、グリムの翻訳としては非常に初期のものであり、しかも口語体で訳されたという点で、注目されるものである。

表2 内容別の口語体の比率 — 『小国民』（年度別） —

年度	論 説	知的読物	フィクション	ノン・フィクション	軽い話題	娯 楽	通 信
M22	0% (0/2)	61.5% (8/13)	100% (5/5)	60.0% (3/5)	0% (0/3)	0% (0/2)	
M23	0 (0/1)	5.3 (1/19)	60.0 (3/5)	0 (0/3)	0 (0/11)	0 (0/5)	0% (0/2)
M24	0 (0/1)	8.7 (2/23)	40.0 (2/5)	0 (0/9)	0 (0/5)	0 (0/3)	0 (0/3)
M25	0 (0/2)	11.4 (5/44)	0 (0/4)	8.3 (1/12)	0 (0/7)	33.3 (1/3)	0 (0/1)
M26	0 (0/3)	0 (0/60)	0 (0/4)	0 (0/9)	25.0 (4/16)	0 (0/4)	
M27	0 (0/6)	2.9 (1/34)	25.0 (1/4)	0 (0/14)	6.3 (1/16)	0 (0/4)	
M28	0 (0/1)	4.5 (1/22)	33.3 (2/6)	0 (0/23)	0 (0/5)	0 (0/6)	0 (0/1)
M29	0 (0/1)	0 (0/39)	33.3 (1/3)	0 (0/7)	0 (0/4)	0 (0/1)	
M30	0 (0/1)	2.3 (1/43)	33.3 (2/6)	17.6 (3/17)	0 (0/11)	0 (0/1)	0 (0/4)
M31	0 (0/1)	8.7 (2/3)	16.7 (1/6)	9.5 (2/21)	0 (0/5)		
M32	0 (0/1)	0 (0/9)	81.8 (9/11)	27.3 (3/11)	8.3 (1/12)		
M33		12.5 (1/8)	100 (8/8)	6.3 (1/16)	14.3 (1/7)	0 (0/1)	
M34		40.0 (2/5)	100 (11/11)	53.3 (8/15)	20.0 (1/5)		
M35	100 (1/1)		100 (4/4)	100 (2/2)	100 (1/1)		100 (2/2)
平均	4.8 (1/21)	7.0 (24/342)	59.8 (49/82)	14.0 (23/164)	8.3 (9/108)	3.3 (1/30)	15.4 (2/13)

例文 3

むか とし よ めひつじ しちひき こひつじ もつ め あ ひ はう
昔し年寄りたる牝羊がありて、七匹の子羊を有て居ました。或る日、母の
ひつじ もり ゆ あ とつ しちひき こ わか わたし こ よ そ
羊ハ森へ往き、餌を取て来るとて、七匹の子に向ひ、「私ハ是れから余所
へ往くから、留守の中にハ氣を付けて居なさい、狼が来るから、浮と戸を開
けてハならぬ、おほかみ あし くらう こあ ちきしれ い
狼ハ足が黒うて声がやさしうないから、直知る」と云ひまし
た。羊の子ハ皆承知して「阿母さん、家を案じないで、往ッていらつしやい」
といひました。はう ひつじ あんしん で
母の羊ハ安心して出かけました。

所々文語調の部分は残っているが、わかり易い口語体である。初期の頃の口語体は、この例文に限らず、少し文語調のところが残っているものが多い。

このような「フィクション」に次いで、「ノンフィクション」・「軽い話題」等が、まだ数は少ないが、少しずつ口語化しつつある。

反対に、「論説」・「娯楽」・「通信」は口語化が遅れている。

【『少年世界』】

『少年世界』についてみても、やはり「フィクション」が口語体の率が一番高い。最低でも明治29年の65.4%で、34年以後は100%になっている。このように「フィクション」の口語体の比率が高いのは、ずっと口語体で作品を発表し続けてきた巖谷小波や門下の尾上新兵衛・木村小舟や硯友社の仲間であった山田美妙・石橋思案等が口語体の作品を多く発表しているためでもある。又、小波の編集者としての影響力もあったであろう。

「知的読物」・「ノンフィクション」・「軽い話題」・「娯楽」も「フィクション」よりもペースは遅いが、徐々に口語体の比率が増えていっている。「通信」もやや遅れて口語化しつつある。

そして、『小国民』と同様、「論説」は他のジャンルより口語化するのが遅いようだ。明治32年や36・37年は、作品自体の数が1~2例しかないの、パーセントでいうと100%口語体である。しかし、他のジャンルがほとんど口語体になっている38・39年に、33.3%、25.0%というのは、やはり文語体から口語体への移行が遅いといえる。

表3 内容別の口語体の比率——『少年世界』（年度別）——

年度	論 説	知的読物	フィクション	ノン・フィクション	軽い話題	娯 楽	通 信
M28	0% (0/6)	7.4% (2/27)	76.5% (13/17)	4.3% (1/23)	0% (0/14)	42.9% (6/14)	0% (0/2)
M29	0 (0/1)	21.4 (3/14)	65.4 (17/26)	26.7 (4/15)	8.3 (1/12)	100 (1/1)	0 (0/2)
M30	/	37.5 (3/8)	78.9 (15/19)	7.7 (1/13)	0 (0/7)	0 (0/1)	0 (0/2)
M31	0 (0/1)	0 (0/8)	94.4 (17/18)	20.0 (3/15)	66.7 (6/9)	0 (0/1)	/
M32	100 (1/1)	25.0 (2/8)	86.4 (19/22)	75.0 (9/12)	30.0 (3/10)	50.0 (1/2)	0 (0/1)
M33	/	100 (7/7)	73.3 (11/15)	53.3 (8/15)	20.0 (1/5)	/	45.5 (5/11)
M34	/	71.4 (15/21)	100 (10/10)	76.5 (13/17)	28.6 (2/7)	/	25.0 (1/4)
M35	/	90.0 (18/20)	100 (8/8)	90.5 (19/21)	44.4 (4/9)	100 (6/6)	50.0 (3/6)
M36	100 (1/1)	90.9 (10/11)	100 (32/32)	93.3 (14/15)	100 (6/6)	100 (5/5)	100 (9/9)
M37	100 (2/2)	100 (29/29)	100 (32/32)	100 (8/8)	90.0 (9/10)	100 (4/4)	100 (6/6)
M38	33.3 (1/3)	96.3 (26/27)	100 (10/10)	95.2 (20/21)	73.3 (11/15)	100 (6/6)	100 (4/4)
M39	25.0 (1/4)	100 (42/42)	100 (14/14)	100 (15/15)	69.2 (9/13)	100 (1/1)	100 (7/7)
平均	31.6 (6/19)	70.7 (157/222)	80.8 (198/223)	60.5 (115/190)	44.4 (52/117)	75.0 (30/40)	64.8 (35/54)

【3誌全体のまとめ】

以上の3誌全体での口語体の比率の高い内容の順番に並べて、全体における口語体のパーセントを挙げると次のようになる。（ ）内の分数の分母は3誌全体の各内容の作品・記事の総数、分子は口語体の作品・記事の数である。

- ① フィクション (76.9% 249/324)
- ② 通信 (45.7% 37/81)
- ③ 娯楽 (36.8% 42/114)
- ④ ノンフィクション (35.4% 140/396)
- ⑤ 知的読物 (29.0% 181/624)
- ⑥ 軽い話題 (14.9% 61/409)
- ⑦ 論説 (9.9% 8/81)

このような結果が出たわけだが、その原因を簡単に分析してみる。

『小国民』・『少年世界』について個々に見ても、3誌全体で見ても、「フィクション」が一番口語体が採用されるのが早く、又口語体の比率も高い。これは大人向けの文章の場合と同じであり、小説が最も早く口語化されていったのと同じ傾向を示している。当時口語体に目覚めたのは、小説家が最も早かった。自分を書きたい内容を文章にするためには、文語体では書けない、どうしても口語体でなければならないと考えた小説家たちが、各人非常な苦労を積み重ねて、口語体を完成させていったのである。

参考までに、山本正秀氏が大人向けの「文芸倶楽部」・「新小説」両誌掲載の小説について調査された年度ごとの口語体の採用率を挙げると表4のようになる。

表4 小説の口語体採用率(山本正秀氏調査)

年 度	M28	M29	M30	M31	M32	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39
口 語 体 採 用 率	16 ^(%)	24	36	45	57	61	71	78	78	87	78	91

この表4と表2・表3の『小国民』・『少年世界』の場合とを比べてみても、やはり同じように口語体が年を追うごとに増えていっていることがわかる。全く同じ方法で調査したかどうかはわからないので、厳密に比較することは出来ないが、両者を比べると、「フィクション」に関しては、『小国民』や『少年世界』の方が口語化するの早いといえるようだ。これは、やはり子ども向きにわかり

易くということを作者が意識していたためであろう。

これに対して、「ノンフィクション」は、「フィクション」よりも口語体が採用されるのが遅いが、内容が格調高く、硬くて重い文章を要求したためであろう。

「通信」の口語体の比率が45.7%で全体で2番目であるが、これは読者に語りかけるように書かれることが多いため。

次いで、「娯楽」が36.8%で3番目に来ているが、おもしろくて肩のこらない内容に文章をあわせたためであろう。

以上の内容のものに比べて「知的読物」は平均すると29.0%と低くなっている。『少年世界』の33年以後は高い値を示しているが、他のパーセントは低い。又、「論説」はどの資料でも口語体の比率は低い。この「知的読物」と「論説」とも口語化が遅れたのは、読者に教えたり、自分の論を納得させたりするには、硬くて重みのある文語体の方がふさわしいという意識があったためだろう。

「軽い話題」の口語体の率が低いのは、短いニュースの多くが文語体であったためである。口語体の冗長な所をさらったのであらうと思われる。

(2) 口語体の文章の敬体・常体・混合体の比率

a 分析の方法

口語体の文章について、さらに敬体の文章か、常体か、敬体と常体の混合体かによって分類し、年ごとにそれぞれの比率を出して、変化を見てみた。対象は(1)と同じ。

b 分析の結果

【『少年園』】

『少年園』（明治21～28年）の作品・記事の口語体のものは、すべて敬体の文末であった。

【『小国民』】

『小国民』について、各年度ごとに敬体・常体・混合体の比率をまとめたのが表5である。

表5 敬体・常体・混合体の比率 — 『小国民』 —

年 度	口 (敬)	口 (常)	口 (敬・常)
M 22	100% (16)	0% (0)	0% (0)
M 23	100 (4)	0 (0)	0 (0)
M 24	100 (4)	0 (0)	0 (0)
M 25	85.7 (6)	14.3 (1)	0 (0)
M 26	75.0 (3)	0 (0)	25.0 (1)
M 27	66.7 (2)	33.3 (1)	0 (0)
M 28	66.7 (2)	33.3 (1)	0 (0)
M 29	100 (1)	0 (0)	0 (0)
M 30	66.7 (4)	33.3 (2)	0 (0)
M 31	100 (5)	0 (0)	0 (0)
M 32	38.5 (5)	53.8 (7)	7.7 (1)
M 33	63.6 (7)	36.4 (4)	0 (0)
M 34	40.9 (9)	40.9 (9)	18.2 (4)
M 35	60.0 (6)	40.0 (4)	0 (0)

※ () 内は作品・記事の数

『小国民』の場合、はじめの頃は口語体のもの自体が少なかったが、明治22～24年までは、口語体のものは敬体が100%であった。それが、その後少しずつ常体の文章が出てきて、明治32年頃から常体が増加している。そして、32年以後は、年によって少々差はあるが、平均すると敬体・常体半々ぐらいになっている。

【『少年世界』】

『少年世界』は、明治28年のはじめから口語体ที่เขา誌よりは多かったが、常体の割合も高く、明治28年で敬体54.5%に対して、常体が45.5%である。それ以後も年度によって敬体が多くなったり、常体が多くなったりしているが、平均すると半分半分である。

表6 敬体・常体・混合体の比率 — 『少年世界』 —

年 度	口 (敬)	口 (常)	口 (敬・常)
M 28	54.5% (12)	45.5% (10)	0% (0)
M 29	53.8 (14)	42.3 (11)	3.8 (1)
M 30	42.1 (8)	52.6 (10)	5.3 (1)
M 31	42.3 (11)	57.7 (15)	0 (0)
M 32	57.1 (20)	41.7 (15)	0 (0)
M 33	34.4 (11)	59.4 (19)	6.3 (2)
M 34	22.0 (9)	75.6 (31)	2.4 (1)
M 35	41.4 (24)	55.2 (32)	4.9 (2)
M 36	68.8 (53)	31.2 (24)	0 (0)
M 37	63.3 (57)	32.2 (29)	4.4 (4)
M 38	41.0 (32)	52.6 (41)	6.4 (5)
M 39	56.2 (50)	39.3 (35)	4.5 (4)

【 3誌全体のまとめ 】

以上の結果から判断すると、児童向けの口語体の文章としては、まず敬体がふさわしいと考えられていたようである。

少し例文を挙げてみる。次の例文4は、『少年園』の明治21年11月3日号の「画探し」（娯楽）の文章で、セントヘレナ島の絵の下についている文章である。

例文4

此の画は^{セント}聖ヘレナ島の墓であります。実に^{ナポレオン}那破翁第一世の墓であります。那破翁は中原を席卷し、遂に仏国の帝王となりましたが、其末路は真に憐れなもので、此の遠洋孤島の鬼となりました。那破翁の霊は定めて此の辺に嗽々と泣て居られるでせう。探してごらん、幽霊ですから一寸には見えませぬ。

敬体の文章であるが、子どもたちに丁寧に語りかけているそのままを文章にしたものである。

もう1例挙げる。例文5は、『小国民』の創刊号（明治22年7月10日発行）の創作童話「夏の夕ぐれ」の一部である。

例文5

右の子供は同胞であります。一番大きいのおはつ、その次をおきくと申します。又あとの二人は男の兄で、兄を芳太郎、弟を孝二郎と申します。今は梅雨あがりの夏の日で、午後の五時頃であります、日の永い時節でありますから、未だ中々夜にはなりません。けれども、おひおひ日脚が戻り参りますから、子供は大層心が促いて、頻りに船頭を促きたてます。

これも、例文4と同じく、目の前にいる子どもたちにやさしく話を語ってきかせるまを書いた文章である。

以上のような敬体に続いて、常体も次第に増えてくるが、常体の方の例文を挙げてみる。

例文6

血球のことで、モー一つお話ししておかなければならぬことがある。それは、白血球とて、形がまん円で、色はなく、循環も遅く、数も赤血球より少ない血球の一種がある。それで、表に作れば下の如くなる

血液	{	養液
		血球 { 赤多
		白少

一体、血球の形の小さいことは、前に申した通りで、八分立方の中に八十三兆といふ大数があり、全身にては、少くも此五百倍はある。

これは、明治28年9月15日号の『小国民』に収められた「血液の自叙伝」という「知的読物」である。先程敬体は子どもに語りかけている調子のものが多いと述べたが、常体もはじめの頃は、この例文のように子どもを前にして話しかけている調子のものが多い。ただ、この場合は、やや年長の児童を対象に、少し難しい科学的な話を伝えるために、やわらかくて冗長な敬体をさけて、簡潔で力強さのある常体を選んだのであろう。

もちろん例外もあるが、難しい内容や硬い内容の場合に常体が選ばれる傾向が見られる。

次に、もう1つ常体の例を挙げるが、これは『少年世界』の明治28年9月1日号の「小説」の欄に載っている「我が母」の一節である。

例文7

あるひがくかう かへり われわれなかま めいめい おや じまん はじ わがちうへ なになに
或日学校の帰途に我々仲間で、各自親父自慢をやり初め、我父上は何々ぢや、
わが おや くちぐち やかま あつ うしろ せんせい こと
我親父はこれこれぢやと、口々に喧しくいひ合た、すると後から先生が来ら
れて、お前の父上は豪傑い人ぢやなといつて、わが あたま な へん せいで
しかつたから、かへ はうへ はな たどたま わら あ 居られた。（思婉坊補、
石童坊作）

これは年長の児童向けに書かれた作品で、常体の文末である。一方、『少年世界』には、幼少の児童を対象とした「幼年」の欄があって、そちらの作品はほとんどが敬体である。このように、対象とする年齢による使いわけも見うけられる。

最後に、混合体について少し見ておきたい。表5と表6を見ると、数は多くはないが混合体が見うけられる。『小国民』・『少年世界』ともに、特に年度の後の方に表われてくる。

これは、1つには、口語体の作品・記事が増加するのにもなって、口語体を書き慣れていない人が敬体と常体の文末を混ぜて書いてしまう場合が増えたためとも考えられる。しかし、当時は、口語体がまだ確立しておらず、敬体と常体の混用についても今ほどうるさく言われていなかったと思われるので、混合体がすべて未熟な文章とは言えないだろう。

次の例文は、『少年世界』の明治38年3月1日号に載った「外国の大道芸人」（坪井正五郎）から引用したものである。

例文8

みな まつ えんにち を おうらい りようがは みせ だ あ いろいろ しょうにん た
皆さんはお祭りや縁日の折りに往來の両側に店を出して居る種々の商人に立
ちまじ いちいち げいにん で あ み か あ
ち交つて色々の芸人の出て居るのを見掛けられるで有りませう、それには流
かうた うた もの あ ほ だらきやう ど な もの あ て じな つか もの あ
行歌を謡ふ者も有る、阿房多羅経を吐鳴る者も有る、手品を使ふ者も有る。
か れんちう つうとうにん ひ と じ き みはから けんぶつにん ぜに
斯う云ふ連中は通行人をばうまく引き留め、時機を見計つて見物人から錢を

とあつ取り集めるのであります。外国にも此類の者が少く無い。人出の多い所や人のあつ集まつて居る場所では屢之を見ます。

この文章を読むと、筆者はある程度意識して敬体と常体を使いわけて、混合体で書いているのではないかとと思われるところがある。すべて敬体で書くと、この当時も言われていたように冗長になる。そこで、リズムを生かして畳みかけていきたいところは常体で書き、読者にいてねいに語りかけたいところは敬体で書いているのではないだろうか。現在でも、全部を敬体で書くと、冗長でだれてしまうので、所々常体を混じえている場合もあるので、当時もこのような使いわけの意識はあったのではないかと考えられる。

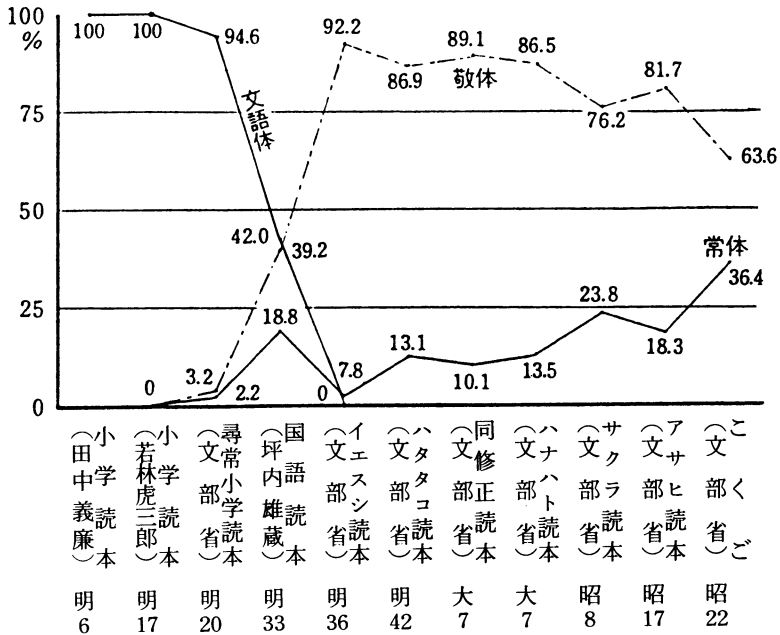
又、混合体の中には、前書きとか後書きの部分だけを敬体でいてねいに書き、本論はひきしまった常体でリズムよく書いていくという使いわけも見られた。

【教科書の文章との比較】

児童雑誌の文章と同じく児童を対象とした文章に教科書の文章がある。両者を比較するために、参考までに古田東朔氏が調査なさった教科書の文体の変遷のグラフ^{注(5)}を引用させて頂く。右のグラフは、明治以後の小学校国語教科書中、代表的なものの巻四を取り上げ、文語体・口語体の敬体・常体の比率がどのように変わったかを示したものである。

古田氏は、各巻について本文の行数でもって算出しておられるので、その点で作品・記事単位で算出した私の今回の調査と算出の方法が違っている。又、私の場合のように「混合体」という分類をたてておられないので、地の文が文語体、会話が敬体という場合は、それぞれ別に扱っておられる。以上のような調査方法の違いから、両者のデータを厳密に比較することはできないが、あくまで教科書の文章の変化を大まかにつかんで比較することはできよう。古田氏も算出方法の説明の中で、「課単位・文単位などで計算し直すときには、違った数字になるだろうが、全体としての傾向はほぼ変わらないものと思う」と述べておられる。

教科書の文体の変遷



これを見ると、まず明治30年代に入って文語体が巻四からは急速に姿を消し、口語体が変わっていったことがわかる。これは私が前回調査した結果と一致する。

又、教科書の場合、明治30年代では口語体といっても敬体の方がずっと多いことがわかる。児童雑誌の場合、明治30年代に入ると敬体と常体がほぼ半分半分であるのと大きく差が見られる。これは、1つには巻四を調査したことによるのかもしれない。もっと高学年用の教科書の口語体の中には、常体も多いのかもしれない。もう1つには、教科書の文章は丁寧な文章でなければならないという意識からきているのかもしれない。

4. おわりに

前回と今回の2回にわたって、明治20～30年代の児童雑誌の文章についての分析を行なって、ある程度のデータが得られた。

その結果、明治20～30年代にかけての児童雑誌の文章の口語化の進み方は、山本正秀氏が調査された大人向けの小説の場合のデータや山本氏がまとめられた言文一致運動史の展開及び古田東朔氏の教科書調査のデータと同じ傾向を示していることがわかった。

又、今回の調査で、口語化が最も早いのが「フィクション」であり、次いで「通信」・「娯楽」・「ノンフィクション」の順で口語体で書かれる比率が高いこと、逆に「論説」・「軽い話題」・「知的読物」などは口語体で書かれる比率が低く、口語化が遅れていたことなどのデータが得られた。

さらに、口語体の中でもはじめは敬体の文末のものが子どもたちにふさわしいと考えられたために多かったが、後に常体のものも増えてゆき、対象年齢・内容によって使い分けられていったこともわかった。

今後は、対象の雑誌をもう少し増やして、より確かな傾向がつかめるようにするとともに、教科書の文章ももう少し詳しく調査して、きちんと比較できるデータを得たい。学年を低・中・高学年と増やしたり、社会や理科の教科書についても調べて、当時の書き手の児童向けの文章についての意識を探ってみたい。

そして、そうして得られた児童雑誌や教科書の文章のデータを、児童文学の文章・文体の分析に生かしていきたい。

注(1) 混合体には、地の文が文語体と口語体の混合文のもの、地の文が文語体で会話文が口語体のもの、地の文が文語体で会話文が文語体と口語体のものが含まれている。

注(2) 『近代文体発生の史的研究』（昭和40年7月、岩波書店刊）の「序章 第三節 言文一致運動史の時代区分と各期概観」。

注(3) 注(2)参照。

注(4) 『言文一致の歴史論考 続編』（昭和56年2月、桜楓社刊）の「言文一致運動の展開」。後の表4に調査データを挙げた。

注(5) 講座 現代語2『現代語の成立』（昭和39年3月、明治書院刊）の「教科書の文章」。